

山梨大学教育学部附属教育実践総合センター センターだより第198号(通巻第265号)

2022年3月11日 発行
山梨大学教育学部
附属教育実践総合センター
TEL 055-220-8325, FAX 055-220-8790
E-mail:jissen@ml.yamanashi.ac.jp
URL: <https://www.edu.yamanashi.ac.jp/aepc/>

※このセンターだよりで紹介した研究会、研修、教育フォーラムに関するお知らせは、改変しない限り、自由に複写、配布していただいて結構です。

■「第38回 教育フォーラム」の報告

— 『伝える』ということ～言語活動の充実に向けて —

令和3年12月13日午後6時から教育学部J422教室に於いて、第38回教育フォーラムをZOOMによるオンラインで開催しました。アクティブラーニングが必須となった学校教育の中で、授業における【対話的】な部分がさらに重視されています。そのなかで、従来から取り組まれてきた言語活動を、どのようにして、充実・発展させ、児童・生徒の資質・能力の育成に繋げるかが、重要な課題となっています。今回のフォーラムでは、「伝える」ことに焦点を当て、プレゼンテーションの道具であり、思考整理法でもある「KP法」を考案された川嶋直氏を講師に迎え、その考え方や実践方法について講演をいただきました。

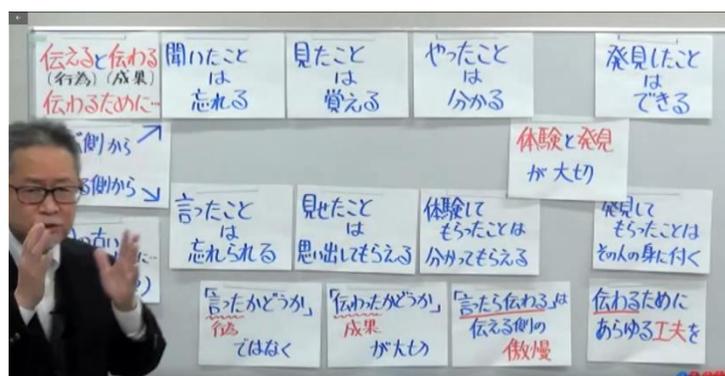
また、コーディネータを務めた本学実務家教員の古屋啓一先生と山梨大学教育学部附属中学校の奥田陽介先生からもKP法（紙芝居プレゼンテーション）を使った授業実践を発表していただきました。

当日、幼稚園2名、小学校6名、中学校12名、支援学校2名、大学教員・教職大学院生12名、教育行政8名、一般3名の計45名の参加があり、これにパネリスト・スタッフ等の8名を加え、総計53名での実施となりました。

講師及び各パネリストからは、次のような内容の講演・発表がありました。

● 講演 川嶋 直（公益社団法人日本環境教育フォーラム理事長）

「伝える」は行為であり「伝わる」は成果である。「伝わる」ためには、体験や発見が大切である。私たちは「伝わる」ために様々な工夫をする必要があり KP法もそのうちの一つである。

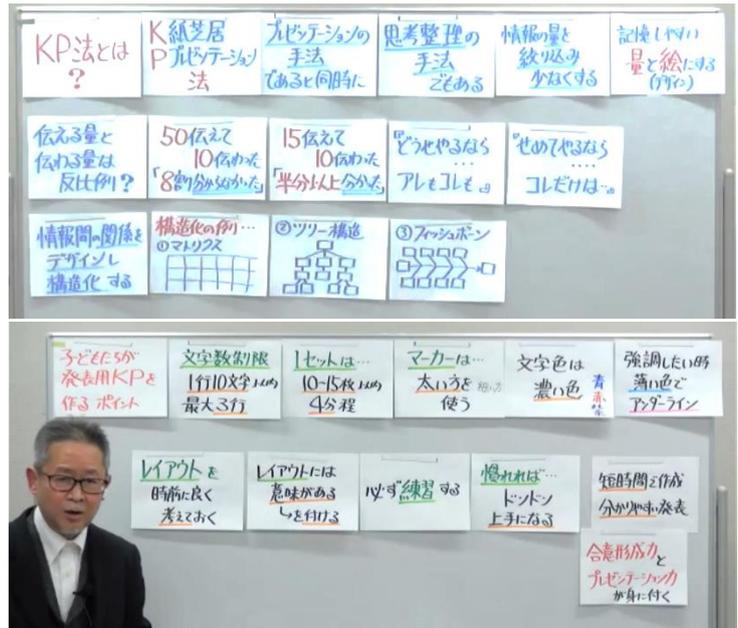


多くのことを教えようとする伝わらない。好奇心を呼び起こしたり、心を開かせたりすることが大切である。

Education の語源は「引き出す」であり、環境教育においては、能力・個性・動機・やる気を引き出し主体性を養うことを目指している。

KP 法（紙芝居プレゼンテーション）はプレゼンテーションの手法であると同時に、思考整理の手法である。KP 法は情報の量を絞り込み、記憶しやすい量と絵にすることが大切である。

KP 法を使い班活動をすることで合意形成力とプレゼンテーションの力が身に付く。これは、大人になっても必要な力である。



● 実践発表 古屋 啓一（山梨大学教育学部附属教育実践総合センター）

古屋先生からは、甲陵中学校での実践についての発表がありました。

1. 実践は①質問づくり「やまなしの謎」②答え探り③KP 法による回答づくり④KP 法で「伝える」(③④新たな発見)⑤小学生との交流⑥川嶋先生の講演の順で行った。

2. ④「伝える」の様子（動画）

中学生の感想

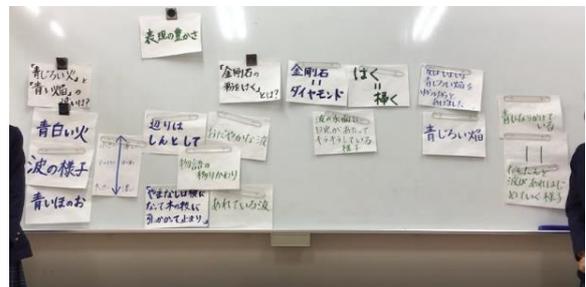
*KP 法を活用して、紙をどのように並べるか、見やすくするかなど多くの工夫をしなければいけなかったのが大変だったが、楽しかった。

*KP 法は言葉だけではなく、見て理解することができるので、今後プレゼンなどをする機会があったら使いたい。他

小学生の感想

*連想したことをポンポン出していただけなのにしっかりと考えがまとまっていくのが便利でした。他などのように小中学生とも好評であった。

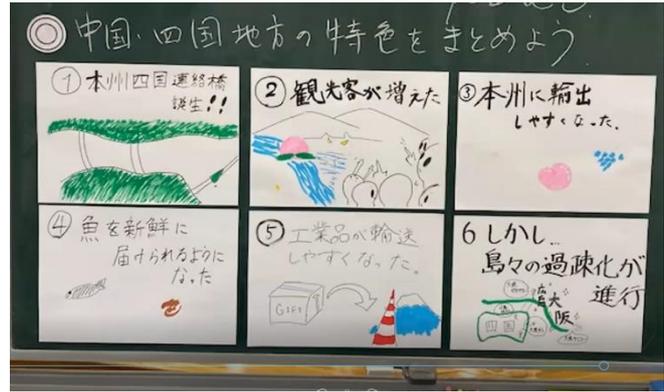
3. KP 法の利点として、簡便であること・協働作業が可能なこと・表現することで考えが深化すること・伝える工夫をすることで相手意識ができること等があげられる。



● 実践発表 奥田 陽介（山梨大学教育学部附属中学校）

奥田先生からは、附属中学校での社会科での実践についての発表がありました。

- | |
|---|
| <p>課題 中国四国地方の特色を紙芝居風にまとめよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 4人グループで考える ② 6枚の用紙にまとめる ③ 一枚の用紙に書ける文字数は15文字程度 ④ 発表時の用紙の並べ方は自由 |
|---|



1時間授業の中で課題に取り組み、代表で二つの班に KP 法で発表してもらった。生徒は大変意欲的に活動した。生徒からは「自分の伝えたいことを短くわかりやく伝えることができるから、とても便利だと思った」などの感想があった。

次に「江戸幕府が滅亡するまでの流れをまとめよう」という課題の実践発表があった。

奥田先生からは、KP 法は「協働的な活動の活性化につながる」「言語活動の充実につながる」「家庭学習でも活用できる」「事前準備が簡単である」の4つの利点があることが説明された。

オンラインでしたが、チャット等で多くの質問が出されるなど、有意義な2時間となりました。

● 参加者のアンケートより

- ・考えを深化させる一つの方法として、使っていきたい。
- ・大変勉強になりました。わかりやすく、今後試してみたいと思いました。
- ・大変楽しく、興味深く聞かせていただきました。「しゃべりすぎ」については反省しきりです。「伝わる工夫」「伝える努力」改めて精進しなくてはと思いました。
- ・KP 法を初めて知りました。おもしろそうなので授業で取り入れたいと思いました。よい情報をありがとうございました。
- ・KP 法というものを全く知らずに参加しました。先生方のお話を伺い、すぐに実践できる簡単さが非常に魅力的だと感じました。また、簡単でありつつも、思考を深めることにも有効であるという一粒で二度おいしい部分もすばらしいと感じました。
- ・KP 法については、今回はじめて学びましたが、大人も子供も使える素晴らしいプレゼンテーション方だと思います。
- ・思考の整理の仕方と、情報の絞り込みをもっと意図的にしようと思いました。文字数の制限やレイアウトは、とても大事な視点で、最後に絵に残った物が記憶されるというシステムもよくわかりました。
- ・KP 法について知らなかったもので、とても新鮮でした。お話を聞かせていただき、実践を紹介していただく中で面白い試みだと思いました。情報の選択を通し、課題の本質に迫れることや、協働の中で活用できる点が特に良いと思いました。小学校で児童が行う場合にはそもそもの情報量の獲得と、どのような場面で KP 法を用いるかが大切になると感じました。
- ・KP 法は、汎用性が高く、学年の発達段階や教科、内容によって様々な使い方がありました。デジタルではないアナログのよさもあり、またデジタルとの融合も考えられたりと、かなり幅の広い使い方ができるのも特徴であるので、教師がどのような意図でどのような授業で使うかが効果的か考えて使うことが大切だと思います。
- ・川嶋先生のご講演に熱がこもっていて、「伝えることの大切さ」が伝わってきました。改めて伝え

ることの工夫を行っていくことの必要性を感じさせられ、場面に応じて KP 法やその他の方法を使い分けしていくことが重要だと考えました。これからの業務や人生に活かせる内容でした。ありがとうございます。

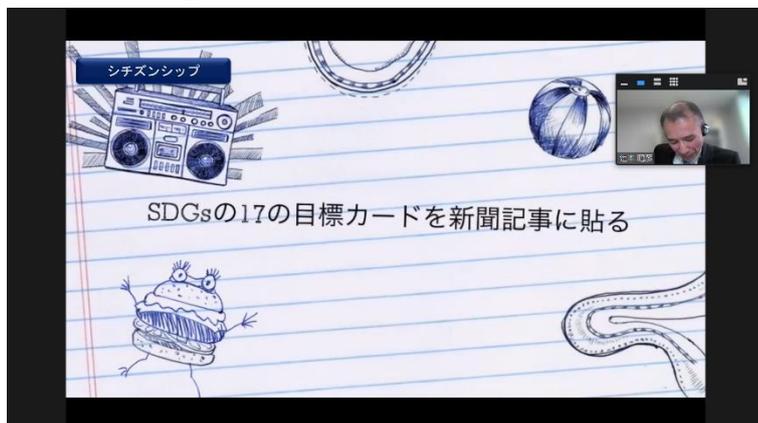
- ・「伝える」「伝わる」ということはとても大事で、その技術については意外と学ぶ場が少ないので、学べて良かったです。
- ・KP 法についてのお話を伺うなかで、KP 法のノウハウだけに留まらず、授業や業務の中で伝えることの核心について考えさせていただきました。せめてやるならこれだけはこの心持ちで情報発信をしていきたいと思います。2 つの実践発表も具体例として、大変わかりやすかったです。今後、自分のレパトリーのひとつに KP 法を加えていきます。ありがとうございました。

■令和 3 年度「第 2 回教師力養成講座」の報告

2 月 4 日（金）、山梨大学教師塾プログラム事業の一環として、「第 2 回教師力養成講座」を開催しました。

本講座は、主に学部 2 年生を対象に、現場経験豊富な各講師からの講義を受けることをとおし、間近に控えた教育実習への心構えを新たにすること、また、自身のキャリア発達を促すきっかけにすることなどを期待して企画されました。当日は、感染症対策のためオンライン開催の中、132 名が受講しました。

第 1 部は、市川三郷町教育長の渡井渡先生を講師としてお招きし、「今日の学校教育の課題～教員を目指している皆さんへのエール～」と題した講演を拝聴しました。いじめや不登校など課題山積の教育現場にあって、児童・生徒理解に基づく専門知識や指導技術、人間性等の重要性について事例を交えてわかりやすくお話をさせていただきました。「教育とは未来を創る仕事である」こと、そして「すべては子どもたちの笑顔のために」という渡井先生のメッセージは、教職を目指す全ての学生に勇気と希望を与えていただきました。



第 2 部は、法政大学の辻本昭彦先生を講師としてお招きし、「自己肯定感」をテーマにした講演を拝聴しました。はじめに各自が成長曲線を作成し、これまでに振り返って自己分析と評価を行いました。そして、それをグループで交流することで受講者相互の理解を深めました。辻本先生が実践の基本としている「自己肯定感」「話し合いの効果」「批判的思考」は学びの多様性と授業の質の向上につながるもので、これから教育実習に臨む学

生の皆さんにとって大変参考となるお話でした。

オンライン開催ではありましたが、お二人の先生方の教職に対する情熱と教育に対する愛情がモニター越しに確かに伝わってくる大変素晴らしい講演でした。受講後のアンケートには、多くの前向きな意見が寄せられ、充実した学びであったことがうかがえました。その一部を紹介します。

【渡井先生の講義の感想】

- ・実体験や実例を出しながら説明して下さったので、聞いていて参考になるとともに興味を持って聞けました。
- ・自分たちの世代の教員が活躍できるということが聞けて教員になるモチベーションが上がりました。

- ・教員という職は難しい職であるがやりがいのある職でもあることに気付きました。
- ・教育実習において、自分のことだけに目が行きそうでしたが、一番大事なのは児童・生徒であることを改めて感じることができました。
- ・教員1年目から先生と呼ばれるわけを、しっかり考えたことなどなかったため、免許を持って採用されたから程度にしか考えていませんでした。教師だからこそできることがある、当たり前のように忘れがちなことを学ぶことができました。
- ・嫌なこともあり大変でもある教員という職業ではあるが、これから先の教育では私たちの世代が役に立てるということを知り、教師について考え直そうと思いました。また、今は専門的な知識を学び、教育実習でその知識が生かせるような経験をしたいです。
- ・教師になることについて難しく考えていましたが、先生の教師の専門性は専門知識だけではなく生徒に寄り添う力にもあるという言葉で気持ちが少し軽くなりました。

【辻本先生の講義の感想】

- ・堅い講義だと思っていたが、おもしろく教員について考えられました。
- ・教員とはこうあるべき、ここが素晴らしいと押しつけがましい感じがせず、自分の経験に基づいた話が面白かったです。
- ・私にとって久しぶりのグループワークでたくさんのことが学べました。教育実習が楽しみになりました。
- ・ブレイクアウトルームでたくさんの意見を聞きながら、自己肯定感について理解を深めることができました。
- ・自己肯定感を高めることが自分の将来を豊かにするということが聞いて頑張ろうと感じました。
- ・自分のことを見つめ直したり他の学生の貴重な意見を聞いたりできて、教職に対する意欲を持ち直すことができました。
- ・辻本先生のお話は、引き込まれる、聞いていて楽しい授業のお手本のように感じました。成績・自己評価曲線を作る際には先生が実際にやってみることでグループワークに移っても戸惑うことなくスムーズに行うことができました。授業の進め方の参考になることがお話の端々にあり、とても参考になりました。

ご講演を務めていただいた渡井渡先生・辻本昭彦先生ならびに開催を支えてくださった関係する先生方、学部事務の皆様、ありがとうございました。

■「第39回 教育フォーラム」の報告

- GIGA スクール構想実現への取り組み～先進校の実践事例を通して～ -

令和4年2月9日午後6時から教育学部 J118-2 教室に於いて、第39回教育フォーラムを ZOOM によるオンラインで開催しました。

学校において PC 端末は、鉛筆やノートと並ぶマストアイテムとされています。小中学校では、GIGA スクール構想により1人1台端末と高速大容量の通信ネットワークの一体的な整備が実現しつつあります。また、それらのハードを活用するためのソフト面の充実や教員の指導力の向上が求められています。

GIGA スクール構想の実現に向けた学びのあり方を小学校・中学校・特別支援学校の実践例などを参考にしつつ意見交換を行いました。

当日は、小学校 19 名、中学校 4 名、高等学校 1 名、支援学校 5 名、大学・教職大学院教員等 13 名、

教育行政 24 名，一般 5 名の計 71 名の申し込みがあり，当日はパネリスト・スタッフ等を含め，総勢 81 名の参加となりました。

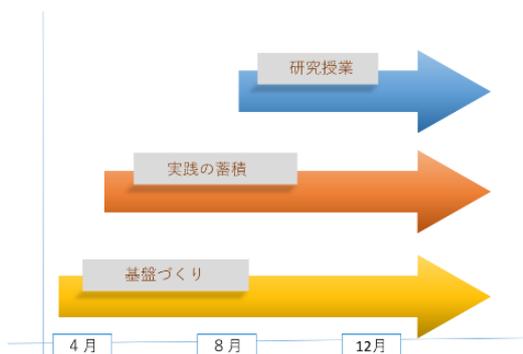
<各パネリストの発表>

泉小学校は windows-PC，勝沼中学校は ChromeBook，附属特別支援学校は iPad と，それぞれ異なるデバイス（一人一台パソコン）を使用しており，パネリストからそれらを活用した様々な取り組みが紹介されました。

○ 泉小学校（佐藤 丈先生 藤森 啓太先生）

GIGA スクールで学校の何が変わるのか？ —ICT 活用による授業改善—

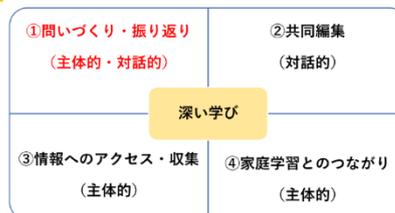
ICT教育の推進 ロードマップ



基盤づくり

- ・教員のICT活用能力の向上
- ・SWOT分析（学校 教員個人）
- ・主体的・対話的で深い学びとは
- ・ICT環境（机椅子 ルール Wifi 端末）
- ・キセキレイタイム（朝学習）でのICT

■ 主体的・対話的で深い学びとICT活用との関係性



泉小学校では、「基盤づくり」「実践の蓄積」「研究授業」の3つをICT教育推進のロードマップとして研究を進めている。

「基盤づくり」として「教員のICT活用指導能力のチェックリスト」「教員ステップアップシート」「SWOT分析」等を行っている。また、「キセキレイタイム」で児童の基本的なスキルの習得にも取り組んでいる。

「実践の蓄積」では、Teamsに実践を投稿したりパワーポイントでまとめたりして共有を図った。KH Coder（テキストマイニング）を使い分析を行った。

「研究授業」では、主体的・対話的で深い学びとICT活用の関係性を明らかにして授業づくりに取り組んだ。第5学年社会「私たちの暮らしと工業生産」の授業において Teams を活用した実践等を行った。

○ 勝沼中学校（内田 瑛一郎先生）

確かな学力を育む学習指導の在り方

～個別最適な学び，協働的な学びを実現させるICTの効果的な活用の探求を通して～

学園祭では全校生徒によるソーラン節に取り組んでいる。ぶどう祭に聖火隊として参加したり，甲州市フルーツマラソンに参加したりするなど地域と一体となって活動している。

授業では，ICT を日常的に活用している。授業の様子を配信し欠席した生徒も自宅で見ることができるようになっている。端末は毎日家庭に持ち帰っている。



行事での活用では「三年生を送る会」で教室のモニターを通じ出題されたクイズに三年生が端末を使い回答した。他、生徒総会や学園祭などでも活用している。

また、オンラインでフランス人(大人)と代表生徒が会話をした。今後、フランスの中学生と本校生徒で会話することを目指している。

情報端末の活用により、教師と生徒・保護者・地域の新たなつながりが生まれた。情報端末はつながりを深めるツールでもある。



○ 山梨大学教育学部附属特別支援学校（波多野 浩史先生）

個に応じた支援・教材の探求 ～日常的なiPadの活用を通して～

特別支援教育においては、「障害による学習上又は生活上の困難さを改善・克服するためにICTを活用する」ことを一つの視点としている。

教師の支援としてのICT活用から段階的に子どもが主体的にICT活用する割合を増やすことを目指していく。

iPadを日常的に朝の会・帰りの会で活用している。会の進行表をスライドで提示したり、健康観察等において、選択項目を自分で選び意思表示したりするツールとして使っている。また、発語の難しい生徒が献立発表をするときの補助としても活用している。アプリはDropTalk6を使用している。

今後、「ICTスキル・リテラシーのポジティブな指導」「学校で日常的に活用していることを生活へ般化」などを目指していく。



<意見交換>

意見交換では、「取り組みにおいて失敗や困難を乗り越えた例」や「各教育委員会とのかかわり」「働き方改革とのかかわり」「オンライン授業の在り方」などについて活発に議論された。パネリスト以外の学校からも取り組みの紹介があり相互に有意義な情報交換ができた。

また、意見交換の最後に常葉大学の三井一希先生にまとめをしていただいた。

<参加者のアンケートより(抜粋)>

- ・とても興味深い内容でした。特に、特別支援教育は今後全ての教師に必要な知識、技術だと考えます。デジタルとアナログのベストミックスを探っていきたいと思いました。ありがとうございました。
- ・ICTの活用について、各学校でも手探りの状況が多いと思います。先進的な実践の報告や、他市町村での活用の様子など、多くのことを知ることができ、非常に有意義でした。ありがとうございました。

- ・小中特支の校種の違いというより、各自治体の差を感じました。情報端末の扱いにおける差異が、格差につながらないように、各校で一層の研究実践を深めていく必要性を感じた。
- ・具体的な実践について知ることができ、大変参考になりました。また、発表者、司会者の青柳先生の時間配分が適切に行われており、さまざまな情報を得ることができ、とてもありがたかったです。また、情報をおもりの参加者の方々からお話が聞けたこともありがたいことでありました。
- ・テーマにもありましたが、GIGA スクールで学校の何が変わるのか職員と共にいろいろ考えているところです。基本的に新しいことをする際には同時に削るものを意識しています。リモート授業を実施する際には、専科制を意識し、教材研究の時間を確保しました。また複数クラスを一人が授業配信することで、残りの職員が評価にあたりたり、個別指導にあたりたり、空き時間として教材研究をしたり、若手職員がベテランの授業を参観する機会としたりしてきました。授業を準備するにあたり、職員の協働の場面が生まれたこともよかったと感じています。本日のセミナーは、本校の活動を見つめ直すとてもよい機会になりました。ありがとうございました。
- ・実践に基づいた非常に参考になる発表を拝聴しました。偶然とはおっしゃっていましたが、県内の3つのOSによる端末の活用例が示され、その点でも意義のあるものだったと思います。一つ一つの実践やICT教材・アプリなどおそらく想像以上に時間がかかっていることと思います。そうしたご苦勞を考えるとさらに広く多くの学校・先生方に知っていただきたい内容だと思いました。特別支援学校の波多野先生の日常の活用の様子を見せていただき、「個別最適化」というキーワードに対する具体的な姿が非常によくわかりました。大変勉強になりました。
- ・コロナ禍なのでオンラインにさせていただきありがたく感じるとともに、参加のしやすさや提示画面の見やすさなどメリットも多くあったと思います。
- ・上野原は遠方なのでとても参加しやすく有り難かったです。しかし、膝をつき合わせてお話をさせていただく機会も大切にしていきたいと思います。
- ・このような機会を与えていただき、大変ありがたく思います。ぜひ、今後も今日的教育課題を中心に、学びの機会を設けていただけたらありがたいです。
- ・今後も同じような研修会がありましたら、ぜひ参加したいと思います。今後ともよろしく願いいたします。
- ・他校の取り組みを知ることができ、とても参考になりました。GIGA スクール元年。キックオフしたばかりで、先生方は、まだどう活用していったら良いのか。どう活用できるのか。手探りの状態です。甲府市は指導主事の先生が、その活用法を情報発信してくださっています。しかし、情報を目にしただけでは、なかなかその先に進めないといった悩みもあるのも事実です。よって、このように、先進的に取り組まれている学校の様子が、いつでも視聴することができ、また、相談に乗っていただくことができるような環境が、一日も早く整備されることを願っています。分散登校が始まりましたが、「自宅にwifi環境がない」「放課後児童クラブにwifi環境がない」といった問題から、先生方は、これらの児童に対応するために、学習支援ソフトを、その都度ダウンロードしています。端末の活用が先生方の多忙化解消につながっていくのは、まだまだ先のことになりそうですが、先生方の意識改革を図り、個々の取り組みに温度差が生じないように、管理職としても力を尽くして参りたいと考えています。青柳先生を始めとし、今回の教育フォーラムの企画・運営にご尽力くださった皆様に、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

■「令和3年度 初任者元気アップ講座」の報告

-山梨大学教師塾プログラム 2021-

教員採用試験に合格している学生・院生や、将来教員になることを希望している本学の学生・院生が、学校現場の様子や教師としての心構え等について小・中学校の現職教員や学校長から話を聞くことにより、教職に就くことの意義を改めて考え直し、展望をもってその準備を円滑に行うことができようとの願いで開催しました。開催にあたっては、甲府市教育委員会より、講師のご推薦はじめ多面にわたりご協力をいただきました。紹介する参加者アンケートのとおり、好評のうちに講座を結ぶことができました。

1 実施日 令和4年2月14日（月）15:00～17:00

2 開催場所 全面オンラインで開催（ZOOM ミーティング使用）

受講生：在宅もしくはLC-11 ないしはLC-17 で受講

3 次第

進行 饗場

(1) 開会の言葉（古屋）

(2) 附属教育実践総合センター長挨拶（長谷川）

(3) 講師紹介（饗場）

(4) 現職教員による講座

①甲府市立山城小学校 主幹教諭 角田 大輔 先生

②甲府市立南中学校 主幹教諭 渡辺 健太郎 先生

③お二人の先生へ質問

(5) 学校管理職による講話

①甲府市立東小学校 校長 新田 正彦 先生

②校長先生へ質問

(6) なんでも相談コーナー（ZOOM ブレイクアウトルーム使用）

○受講者：校種ごと7つのグループ 少数のメンバーで相談員と対話

○相談員：客員教授9名（菰原 小林 嶋崎 清水 窪田 石丸 中込 奥田 井上）

(7) 御礼と閉会の言葉（古屋）

4 受講者数

20名：小学校13名，中学校5名（数学1，国語2，体育1，理科1），特別支援学校2名

5 アンケートより

講座の構成

○小グループでの相談コーナーでは、自分の聞きたいことなどが聞けてよかったです。

○自分の採用された県でもこのような講座が開かれていたが、去年新採用の先生の話を知ったので、こちらでは経験豊富な先生方の話を聞いて良かった。

○様々な先生の話を知ることが、なかなかなく、貴重な時間でした。

○4月から教員になる人で参加していない人がもったいないなあと感じました。今日お話していただいたことを共有してあげたいと思います！個人的には小学校1.2年生の時にお世話になった角田先生のお話が聞いてよかったです😊

○相談時間をもう少し欲しかったです。それだけで1つの会としても良いと感じました。

講話・相談内容

- 経験豊富な現場の先生から直接話を聞くことができ、とてもためになった。
- 普段聞けない話や現場でのわからないことを聞くことができました。やっとスタートラインに立つんだなと感じました。頑張ります
- 先生方の話し方がとても聞きやすく引き込まれるような話し方で、自分もこうなりたいなと新たな目標を見つけることができました。
- 教師になるにあたっての姿勢や、教師になってからの不安などについての話をたくさんの先生から詳しく聴くことができ、とても参考になったと思う。
- 4月からの具体的なイメージができる内容で、非常に有意義だと感じた。

講座を終えて（抱負）

- 自分が本当に教師となれるのか、不安でいっぱいですが、自分にできることを探して学び続けていきたいと思いました。
- 授業ではわからないことについてたくさん教えていただけて、少し安心しました。私自身悩みすぎてしまうことが多いので、すべて完璧思考にならず、一生懸命さで頑張りたいです。
- 大学では学べなかったことが本講座によって学ぶことができました。子どもたちを第一に大切に
する教員になります。
- より働くことが現実味を帯びているこの時期に話を聞くことで、残りの準備期間の取組や心構えを改めることができました。
- 様々な立場の先生方からお話を聞けたことで、それぞれの先生方の考え方や大事にしていることが異なり、それによって学校教育が成り立っているのだと感じました。自分の理想像をしっかりと考え、4月からがんばりたいと思います。
- 来年からの不安が解消できました。
- 現場の先生方からの貴重なアドバイスをいただき、改めて4月から頑張ろうという気持ちになりました。
- 現場の先生の話聞いて4月からのことをイメージしながら聞くことができました。
- 相談コーナーで、4月からの不安等について丁寧に答えていただけたことで、新たな視点を持つ
ことができました。
- 現場での様子を講話していただいたり、実際にブレイクアウトルームで詳しいことを聞いたりでき、新採用としての自覚を感じつつも不安が少しやわらいだ。4月から頑張りたい。

※ すべての回答を掲載しました。ただし、「ありがとうございました。」といったコメントは割愛しました。

■「第100回国立大学教育実践研究関連センター協議会・総会」の報告

第100回国立大学教育実践研究関連センター協議会総会が、2022年2月18日（金）10:00～16:00に、東京学芸大学をホストとするZoomオンライン会議で開催されました。全国18の加盟センターから40名の参加があり、本センターからは、青柳特任教授と成田准教授が参加しました。まず、セ

ンター協議会会長の小林正幸氏（東京学芸大学）の開会挨拶がありました。次に、役員会から次期会長（現会長の退会に伴う代行のため任期は1年）として須曾野仁志氏（三重大学）が推薦され、承認されました。また、次期会長から次期監査（現監査の退会に伴う代行のため任期は1年）として、森下孟氏（信州大学）が推薦され、承認されました。その後、2021年度会計中間報告があり、2022年度予算案が承認されました。

午前の後半は、現在の教育実践や情報教育、教育臨床に関して、以下の3件の取り組みの報告と協議がおこなわれました。

【司会：木谷秀勝（山口大学）】

1. 「三重大学での教育情報化セミナー報告」 岡野昇（三重大学）
2. 「教師教育者に関する研究報告」 土田雄一（千葉大学）
3. 「実践のエネルギーが生み出したもの」 小林正幸（東京学芸大学）

午後は、各センターからの報告のあと、今後のセンター協議会の活動に向けて意見がかわされました。

次回、第101回センター協議会総会は、2022年9月9日（金）10:00～16:00に開催されます。対面、オンライン開催等の開催形式は未定です。

■「令和3年度 教育ボランティア活動」の報告

-教育ボランティア活動における学生運営委員会を中心とした活動の様子-

教育ボランティアスタートセミナー

今年は甲斐市立竜王小学校の久保田勲先生をお招きし、4月14日（水）に教育ボランティアスタートセミナーを実施しました。当日は58名の学生の参加を得て、例年にも増して充実したセミナーとなりました。



でも教育実習を終えた学生の話は、これから教育実習に向かう学生にとって、教育ボランティア参加を前向きに考えるよいきっかけになりました。

久保田先生には、教育ボランティア活動に参加する意義について話をいただきました。

昨年と同様に行われたグループ協議では、以前から教育ボランティア活動に参加している学生とこれから活動を始めようとする学生とで積極的な意見交換、話し合いが行われました。教育ボランティア活動に参加するにあたって、また活動を通しての不安や悩みだけでなく、そこで得られる学びや成長についても意見交換が行われていました。中



久保田先生のお話を通して、教育ボランティア活動で教育現場に直に触れることで、実際の学校・子どもたちの様子を知ることができる貴重な学びの場であるということを知ることができました。実際の学校現場の先生のお話を聞くことで、より一層、教育ボランティア活動への参加意識が高まったといえます。

事後アンケートでは、回答者の9割以上から本セミナーの内容について『とてもよかった』との回答があり、とても有意義なセミナーとなったと感じています。また、自由記述欄には「教育ボランティア活動に対する不安が解消された。」「すでに教育ボランティア活動に参加している先輩や、現場の先生から貴重なお話を聞けてよかった。」といった記述がたくさんあり、参加者にとって意味のある時間になりました。

教育ボランティアガイダンス（前期・後期）

前期は4月21日（水）【161名参加】に、後期は10月6日（水）【107名参加】に、それぞれ教育ボランティアガイダンスが行われました。新型コロナウイルス感染症の収束が見通せない中でしたが、多くの学生の参加を得ることができました。教育ボランティア委員長の小池健二先生から活動の心構えとして、子どもの前では「先生」としてきちんとした態度で臨むこと等のお話をいただいた後、各受入先の活動内容の紹介、事務手続き、活動上の注意点等の説明がありました。

意義：教育ボランティア活動は、教育現場の学習支援等を通じて教員を目指す学生の学びを深めることを目的としていることを認識しました。

内容：活動内容一覧を基に、23カ所の受入先の活動内容を確認し、授業時・放課後の学習支援、進路相談、部活動指導をはじめ、多岐にわたることを知りました。

留意点：活動先の選び方、活動に臨む際の服装・態度や、守秘義務を始めとする遵守・禁止事項等、18項目の留意点と、単位取得条件等を確認しました。



対策：新型コロナウイルス感染症対策行動指針やマニュアルを確認し、活動2週間前からの健康観察をするよう説明がありました。

加藤学生運営委員会委員長から（前期）

自分の経験から、①学校現場ではどんなところで皆さんの力を必要としているのか②教育実習とは違い、教育ボランティア活動は内容がプログラムされているわけではないということ踏まえ、教育ボラン

ティア活動でどんな学びを得たいのかということを考えて欲しいという内容でした。





宮島学生運営委員会委員長から（後期）

教育実習や教員になった時にとっても役に立つことや、受け入れ校では、学生の参加を心待ちにしているので頑張りましょうという内容でした。

◇ 現場経験が少ない学生には願ってもないチャンス！
子どもたちとの接点を大切に「学ばせていただく」という姿勢を持ち、教育現場での貴重な経験を積んで教員を目指していくことを確認し合いました。

教育ボランティア報告会

12月8日（水）、感染症対策を十分に行う中、104名の参加者が2教室に分かれて教育ボランティア報告会が行われました。



初めに教育ボランティア委員長の小池先生、学生運営委員長の宮島さんのお話がありました。続いて、生活社会教育コース4年の吉川理歩さん、科学教育コース4年の今泉健汰さんによる教育ボランティア体験談の



発表が行われ、14グループに分かれてのグループ協議へと報告会は進んでいきました。

グループ協議では「教育ボランティア活動で学んだこと」をテーマに、各グループにおいて熱心な話し合いが行われ、「クラスによって実態が異なるため、児童生徒や学級の、それぞれに合った教え方が必要であること」や、「児童生徒の気持ちを理解し、受け止めたうえで声掛けをすることが大切だということ」など、多くの貴重な意見が出されました。

教育ボランティア活動を通して学んだことを学生同士で共有し、活動中に生じた疑問点や悩みを、学年や活動内容・活動場所を超えて共有することで、学びをより深めることができました。特に、教育実習を終えた3・4年生からのアドバイスは貴重でした。今後も感染症対策により様々な制約がある中での教育ボランティア活動になると思いますが、「現場のリアル」を肌で感じられる絶好の機会である教育ボランティア活動を通して、多くの経験を積んでいくことを再確認しました。



おわりに・・・

上記以外の活動として、教育ボランティアガイダンスブックの編集・発行、学生運営委員会によるボランティア通信の発行、教員の教育ボランティア委員会による受入先訪問や教育ボランテ

ィアだよりの発行などが行われています。

今年度も新型コロナウイルス感染症の影響により、受け入れの中止・中断等もある中、60箇所
の受入先の協力を得て、延べ224名の申し込みがあり、延べ191名が教育ボランティア活動に取
り組むことができました。また、67名の学生が単位取得をすることができました。

受入先をはじめ関係の皆様へ感謝申し上げるとともに、今後も教育ボランティア活動がますます
充実したものとなるよう努力していきたいと考えています。

■むすびに -2021年度をふりかえって-

センターだより第198号をお届けします。198号は今年度最後の号となります。

実践センターは、今年も、県内教育委員会・教育機関、附属学校園、地域と連携しながら、①
教員養成から採用までの教職支援、②教員養成・研修の一体化した教員育成事業、③教育活動・
研究活動事業を行ってきました。センターだよりでは、こうしたセンターの活動の一部をお伝え
してきました。

この一年をふりかえってみますと、コロナに翻弄され、その都度、行事の延期やオンラインへ
の切り替えを余儀なくされました。ただその一方で、オンラインと対面のそれぞれの良さに気づ
くこともできました。例えば、本号に掲載の「第38回教育フォーラム」「第39回教育フォー
ラム」はオンラインで実施しましたが、事後アンケートにおいてオンライン開催を歓迎する参加者
の声が複数あがりました。対面では参加の難しかった遠隔地からの参加もありました。職場や自
宅からそのまま参加できる気軽さが参加者増につながったようです。

教員養成の場では、コロナが長期化することを見据えた支援のあり方を考えていく必要も痛感
しました。授業や講座等での対面／オンラインの選択がその人のその後にどのような意味を持つ
のか、それぞれの選択を補完するような支援のあり方を、そして学生自身が自分で一步を踏み出
せるような支援のあり方を考えてみる必要があると、自分自身に足りなかった視点として感じて
おります。

最後に、この一年、本当に嬉しくありがたかったことは、実践センターの先生方が数多くある
センターの行事を一生懸命企画し運営してくださったことです。これまでやってきたことをその
ままやることもできるのですが、なぜやるのか？何のためにやるのか？どんな人に対してやるの
か？ということ問い直しながら企画を行っていただきました。その答えは、教師力養成講座、
初任者元気アップ講座、教育フォーラム、教職支援室の個別指導、教育ボランティア活動、地域
学習アシスト活動、教職キャリア・ポートフォリオ利用等において、参加者が増えるという形に
なって現れたと思っています。まだまだ正解には至りません。そもそも正解などないのかもしれ
ませんが、来年度もセンターの先生方とともに悩み、歩んでいきたいと思ひます。

(附属教育実践総合センター長 長谷川 千秋)